



Title	Ersatzinfinitiv と過去分詞の構造
Author(s)	荻原, 達夫
Citation	独語独文学研究年報, 31, 65-81
Issue Date	2004-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/26159">https://hdl.handle.net/2115/26159</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	31_P65-81.pdf



## 1. はじめに\*

## 1.1. 目的

ドイツ語の完了形は助動詞 *haben/sein* と動詞の過去分詞形によって複合的に表現されるが、これには例外があり、動詞が不定詞を伴う場合——典型的には語法の助動詞 (1a), 知覚動詞 (1b), 使役動詞 (1c)——は動詞が過去分詞形をとらず、代わりに不定詞の形が用いられる。いわゆる Ersatzinfinitiv である:<sup>1</sup>

- (1) a. Peter hat nach Frankfurt fahren *müssen*.  
 b. Peter hat Hans kommen *sehen*.  
 c. Peter hat Hans kommen *lassen*.

Ersatzinfinitiv が現れる完了形には (2) に示すような、助動詞の位置に関する統語的特徴があり、この点でも例外的である<sup>2</sup>。

- (2) a. weil Peter nach Frankfurt *hat* fahren müssen  
 b. weil Peter nach Frankfurt fahren *hat* müssen  
 c. \*weil Peter nach Frankfurt fahren müssen *hat*

この論文では Ersatzinfinitiv のこのような性格を統語的、形態的、音韻的に分析し、さらに過去分詞形の形成プロセスを明確にすることにより、通常の過去分詞形が阻止され、Ersatzinfinitiv が出現するメカニズムを明らかにする。

## 1.2. 構成

この論文の構成は次のようになっている。まず第 2 節で過去分詞形の構造と統語派生に関わる概念（とくに「移動」）を導入する。次に第 3 節で Ersatzinfinitiv と動詞の位置および

\* 本稿の内容の一部は SLC (Sapporo Linguistic Circle) での口頭発表 (“The Verbal Complex in German”, 2000 年 8 月 31 日) にもとづいている。また『年報』査読者より貴重な指摘・意見を多数いただいた。ここで謝意を表す。もちろん本稿に含まれる誤りに関してはただ筆者のみがその責任を負う。

<sup>1</sup> Ersatzinfinitiv ではなく、通常の過去分詞形を使うと文の許容度は低下する。ただしその低下の程度は一様ではない:

- (i) a. \*Peter hat nach Frankfurt fahren gemusst.  
 b. ??Peter hat Hans kommen gesehen.  
 c. ??Peter hat Hans kommen gelassen.  
 d. ?Peter hat Hans kommen gehört.

この許容度の差については第 5 節で考察する。

<sup>2</sup> (2a) が最も標準的な形であるが、(2b) も許容されやすい形である。この形は現代の書き言葉でも散見する:

- (i) a. [die Ministerin sagte, die] Tatsache, dass ein Unternehmen wie das in Belgien über zwei Jahre mit Hormonen belastete Zusatzstoffe vermarkten *habe* können, mache ein strukturelles Problem deutlich. (Die Welt, 2002.07.16)  
 b. Dass es so weit kommen *hat* können, ist in der Logik der Virenautoren alleine dem quasi-Monopolisten Microsoft zuzuschreiben. (ZDNet, 2003.08.12)  
 c. Solschenizyn auf die Frage [...] gegenfragt, wer denn sonst die Bücher hätte schreiben sollen, die er noch schreiben *hat* müssen... (<http://www.buchkritik.at/kritik.asp?IDX=592>)  
 d. Es hat noch nie ein Übersetzungsprogramm gegeben, das einen menschlichen Sprachexperten ersetzen *hätte* können. (<http://lostintranslation.com/deutsch/philosophie/annahmen.shtml>)

(2c) は (2a, b) に比べて許容度が明らかに低い、可能になることもある。これについては第 5 節で考察する。

移動の関係を明らかにし、第4節で過去分詞形の形成プロセスという観点から Ersatzinfinitiv が現れるメカニズムを示す。第5節はこの結論を応用して他の現象について考察する。第6節がまとめである。

## 2. 過去分詞形の構造と統語派生

Ersatzinfinitiv の本質を解明するには過去分詞形の構造を知ることが——第4節において明らかになる理由により——不可欠である。そこで Ersatzinfinitiv の分析に入る前にまず過去分詞形の構造を明確にする。さらに過去分詞形が阻止される統語的環境についても簡単にまとめる。また文の派生プロセスに関してあらかじめ想定されていることについても提示する。

### 2.1. 過去分詞形の構造

ドイツ語の過去分詞は (3) に示すように「前綴り+語幹+語尾」という形に分解できる。

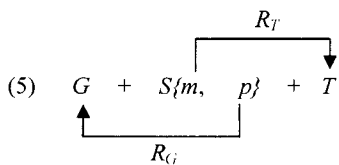
- (3) a. ge-lob-t, ge-red-et, ge-sag-t, ...  
 b. ge-fahr-en, ge-seh-en, ge-schrieb-en, ...

語尾の形態が (3a) のように -t になるか、それとも (3b) のように -en になるかは動詞 (語幹) によって決まっている<sup>3</sup>。つまり語尾の形態は動詞のもつ形態情報に依存している。

これに対し前綴りは、どのような形態になるかではなく、添加されるかどうかは動詞によって決まっている。ただし、動詞の形態情報ではなく、(4) に示すように、音韻情報に依存している<sup>4</sup>。

- (4) a. hinterbringen, übergeben, umgehen, ... → ge- あり  
 b. hinterbringen, übergeben, umgehen, ... → ge- なし

以上のことから、前綴りを  $G$ 、語幹を  $S$ 、語尾を  $T$ 、動詞の形態情報を  $m$ 、音韻情報を  $p$  とすると、過去分詞の構造は次のように表せる。



(5) の  $R_T$  は語幹のもつ形態情報にもとづいて語尾を形態的に指定する規則  $R$  を示し、 $R_G$  は音韻情報に従って前接辞 (前綴り) 添加の有無を判断する規則を示している。 $R_T$  と  $R_G$  は別の情報を参照しているから、それぞれ独立した規則である。 $R_T$  が先に適用されるのか、それとも  $R_G$  が先に適用されるのかは過去分詞の形態からだけではわからない<sup>5</sup>。 $R_T$  だけ、あるいは  $R_G$  だけ適用されている形は一般に表れないからである<sup>6</sup>。この問題は 4.2.1 節で再び

<sup>3</sup> 語尾の -t が -et となる規則は、過去分詞形に限らず、動詞の活用全般に見られる規則なのでここでは考慮しない。

<sup>4</sup> ドイツ語の語形変化全体の中で、語尾だけではなく、前綴りの付加まで文法化されているのは過去分詞形を作るときだけである (Duden 1998: 119)。その意味で過去分詞の ge はユニークだと言える。

<sup>5</sup> 形態・音韻規則は線形的にしか適用されない。Bromberger/Halle (1991) を参照。

<sup>6</sup>  $R_G$  と  $R_T$  がそれぞれ独立した規則ではなく、 $G$  と  $T$  は同時に添加され、後で  $G$  が削除されると考えることもできる (査読者による指摘)。この場合、過去分詞が音韻的に完成してから一括して削除規則を適用する

取り上げ、明らかにする。

## 2.2. 過去分詞形が阻止される環境

Ersatzinfinitiv を用いるか否かは動詞単独では決まらない。(1) で挙げた動詞でも環境を變更すると通常の過去分詞形になるからである<sup>7</sup> (6a, b). 統語的特異性もなくなる<sup>8</sup> (6c, d).

- (6) a. Peter hat nach Frankfurt *gemusst*.  
b. Peter hat Hans *gesehen*.  
c. weil Peter nach Frankfurt *gemusst hat*  
d. weil Peter Hans *gesehen hat*

したがって記述的には、Ersatzinfinitiv が可能になるのは——あるいは過去分詞形が阻止されるのは——その動詞が不定詞をとるという性質が統語的に顕在化されたときのみである、ということができる。ただし実際の統語環境によって許容度は変化する:

- (7) a. Er hätte doch wenigstens schreiben *können*.  
b. \*Er hätte doch wenigstens schreiben *gekonnt*.  
c. Schreiben hätte er doch wenigstens *gekonnt*.

(7)の文はどれも können が不定詞 schreiben をとっているが、(7c)のように不定詞と können が隣接していない場合は通常の過去分詞形にしても許容度があまり下がらない<sup>9</sup>。逆に Topikalisierung が行なわれても、隣接していると過去分詞形は阻止される<sup>10</sup>:

- (8) a. Schreiben *können* hätte er doch wenigstens.  
b. \*Schreiben *gekonnt* hätte er doch wenigstens.  
c. Austrinken *wollen* hat er das Bier keinesfalls.  
d. \*Austrinken *gewollt* hat er das Bier keinesfalls.

ここからわかるのは不定詞の隣接がおそらく(5)に示した規則  $R_T$ ,  $R_G$  のうちいずれか(あるいは両方)を阻止しているのだろうということである。

---

ことになり (ge-hinterbrächt-t → o-hinterbrächt), 規則間の関係は明白である (ただし削除が適用されない場合に \*gehintergebracht を排除して, hintergebracht を生成するような別の規則が必要になると思われる)。この可能性については別の機会に検討したい。

<sup>7</sup> 非標準語ではこの場合でも (i) のような Ersatzinfinitiv が可能なことがある (Engel 1988, Zehetner 1985)。

- (i) Er hat nicht anders *können*.

統語的にも Ersatzinfinitiv に似た配置をとる:

- (ii) a. weil er nicht anders *gekonnt*/\**können* hat.  
b. weil er nicht anders hat *können*/\**gekonnt*.

<sup>8</sup> Ersatzinfinitiv のときのような配置はとれなくなる:

- (i) a. \*weil Peter nach Frankfurt *hat gemusst*  
b. \*weil Peter Hans *hat gesehen*

<sup>9</sup> Besten/Edmondson (1983: 178) は (7b) より (7c) のほうが significantly better であるとしている。Curme (1922: 589) は (7c) を特に断りもなく例文として挙げている。また、私のインフォーマントチェックでも (7c) は「標準的ではないが、言えないこともない」との回答が得られている。

<sup>10</sup> もっとも不定詞が隣接するだけで過去分詞形が阻止されるわけではない。次のような場合 Ersatzinfinitiv は許されない (Duden 1998: 191, Bausewein 1990: 231):

- (i) a. Das Buch wurde von ihm liegen gelassen/\*lassen.  
b. Der Kuchen wurde stehen gelassen/\*lassen.  
c. Der Gefangene wurde laufen gelassen/\*lassen.

このことは完了時制を形成するときと受動態を形成するときでは過去分詞の統語的性格が同じではないことを示唆している。

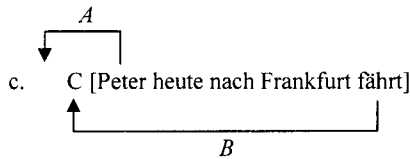
### 2.3. 文の派生と移動規則

不定詞の隣接と規則の適用の関係を分析する前に、文の派生について仮定されていることをまとめておこう。

#### 2.3.1. 文の派生

標準的な統語理論ではドイツ語の文は「移動」を介して派生される<sup>11</sup>。たとえば (9a) の文は (9b) のような形から Peter を C の左に, fährt を C にそれぞれ移動させて形成する。図式的に表すと (9c) のようになる<sup>12</sup>。

- (9) a. Peter fährt heute nach Frankfurt.  
 b. C [Peter heute nach Frankfurt fährt]



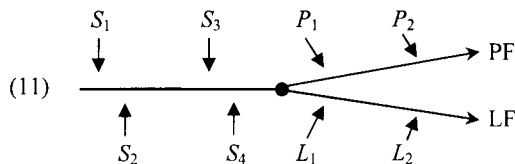
移動 *A* がなければ, (10a) のような文が派生される。C に補文標識が挿入されれば (10b) のような文が派生される。

- (10) a. Fährt Peter heute nach Frankfurt?  
 b. dass Peter heute nach Frankfurt fährt.

このように文の派生には「移動」が密接に関わっている。

#### 2.3.2. 移動のタイプ

生成文法によれば統語派生は派生のある時点で意味解釈への入力 (LF) と音声解釈への入力 (PF) に分岐する。そしてこの仮定に従えば, 移動がどの時点で起こっているのかによって移動をタイプ分けすることができる。これを図式的に示すと (11) のようになる。



$S_1 \sim S_4$  は分岐以前 (狭義の統語派生) の移動,  $P_1, P_2$  は分岐後 PF への入力となる過程での移動,  $L_1, L_2$  は同様に LF への入力のための移動である。S と P は効果が PF に及ぶので移動が音声的に反映される (広義の統語派生)。L の効果は PF に到達しないので移動があっても音声的に現れない。逆に S と L は意味解釈に関わるが, P は影響しない。

(9c) の移動のうち, *A* の移動 (Topikalisierung) は意味解釈に影響することがある。たとえば (12) の 2 つの文のうち, er が Hans を指すという解釈ができるのは (12a) だけである (判断は Webenhut 1992: 172f による)。

<sup>11</sup> 例えば Thiersch (1978), Besten (1983), Haider/Prinzhorn (1985) などを参照。

<sup>12</sup> 議論を単純にするため fahren の人称変化については考えない。

- (12) a. Welche der Behauptungen, die Hans<sub>1</sub> während der Konferenz gemacht hatte, musste er<sub>1</sub> zurücknehmen?  
 b. \*weil er<sub>1</sub> die Behauptung, die Hans<sub>1</sub> während der Konferenz gemacht hatte, zurücknehmen musste.

同一指示の解釈は LF で行なわれる。その解釈がちがうということは (12a) と (12b) では代名詞の指示関係が LF で異なっていることになる。よってこの移動は *S* の移動でなければならない。

*B* の移動はどうか。たとえば (13) のような 2 つの構造を考えてみたとき、(13a) と (13b) では意味解釈に違いがない。

- (13) a. der Zug [*C* ] in wenigen Minuten abfährt  
 b. der Zug [*C* fährt ] in wenigen Minuten ab *t*

(13b) の fährt は LF では *t* の位置で解釈されるので、この移動は、あったとしても、LF ではキャンセルされてしまうはずだからである<sup>13</sup>。このような「意味がない」移動を分岐点以前に行なう理由はないので、これは *P* の規則であると考えられる。

また (14) に見られるような、いわゆる虚辞の *es* の分布も動詞の移動が *P* の規則であることを支持する。

- (14) a. Es [*C* wurde] von den Griechen getanzt.  
 b. Von den Griechen [*C* wurde] getanzt.  
 c. [*C* dass] von den Griechen getanzt wurde.

虚辞 *es* は LF では解釈を受けないので、LF への入力にはならない。つまり *es* 挿入は *S* に相当する規則ではなく、*P* タイプの規則である。*P* の規則が参照するのは音韻情報だから、動詞の移動が *P* の規則であると考えれば、虚辞 *es* の挿入は、*C* の音韻情報が空であること、*C* の前も同様に空であること、の 2 点 (15a) を確認することで正しく適用できる (15b, c)。

- (15) a. [*C* ] von den Griechen getanzt wurde  
 b. es [*C* ] von den Griechen getanzt wurde  
 c. es [*C* wurde ] von den Griechen getanzt *t*

これに対し、もし動詞の移動が *S* の規則であるなら、*es* 挿入適用の時点で *C* の音韻情報が空かどうかは適用条件ではなくなり、規則は *C* の前が空であることだけでもとづいて適用されることになる。ところがこれは (16) のような出力を作り出してしまう。

- (16) es [*C* dass] von den Griechen getanzt wurde

つまり *es* 挿入は *P* の規則であるが、その適切な実行を判断できるタイミングは動詞の移動が行なわれる前の時点であり、したがって動詞の移動も必然的に *P* の規則ということになる。

<sup>13</sup> すなわち LF では (13a) に近い形で解釈される。この移動がキャンセルされない場合 (つまり *S* の移動である場合) は *ab* が LF で fährt のところに移動することになるが、その移動を証明するのは難しい。

### 3. Ersatzinfinitiv と統語構造

#### 3.1. 動詞の位置

以上のことを踏まえて Ersatzinfinitiv をもつ文の統語構造について考えてみよう。

(17) Peter hat nach Frankfurt fahren *müssen*. (= 1a)

動詞の移動は *P* タイプの移動 (*P* 移動) だから, (17) は派生が分岐した時点では *C* は空のはずである. そのときの *hat* の位置はどこだろうか. (18a) のような文ならば (18b) から考えて (18c) を想定するのは容易である. そして (18c) に倣って構造を仮定すると (19a) のようになりそうである.

(18) a. Peter *ist* nach Frankfurt gefahren.  
b. weil Peter nach Frankfurt gefahren *ist*  
c. C [..... gefahren *ist*]

(19) a. C [..... fahren müssen *hat*]  
b. \*weil Peter ..... fahren müssen *hat*  
c. weil Peter ..... *hat* fahren müssen

ところが *C* が語彙化されたとき (*C* → *weil*), (18c) は動詞の位置がそのまま出力される (→ (18b)) が, (19a) をそのまま出力すると (19b) のようになり, 不適切な形ができてしまう. 実際の形は (19c) でなければならない<sup>14</sup>. もちろん (20) のような短距離移動があると考えることもできる.

(20) Peter C ..... fahren müssen hat

しかしながらこれは単に結果を導き出すためだけの移動で, (19b) がなぜ排除されるのかが明らかではない. つまり, 文末の動詞群が正確にはどのような構造になっているのかを明らかにしないと, この問題は解決しない.

#### 3.2. 動詞の移動 (1)

まず次のような文の構造を考えてみよう.

(21) a. [Schreiben, dass er nicht kommen darf], hat er nicht mehr können.  
b. Da hat er nicht mehr [schreiben] können, [dass er nicht kommen darf].


ここで [dass er nicht kommen darf] = CP とすると, (21a) から [schreiben CP] は構成素になっていることがわかる. ところが (21b) では *schreiben* と CP が *können* によって分断されていて, 1つの構成素になっていない. Topikalisierung は (22) のように構成素を単位として行なわれるから, [schreiben CP] は移動が適用される段階で構成素をなしていなければならないはずだが, (21b) ではこれが成立していないのである.

(22) C [ ..... [schreiben CP] ..... ]

<sup>14</sup> あるいは上述のように weil Peter ..... fahren *hat* müssen.

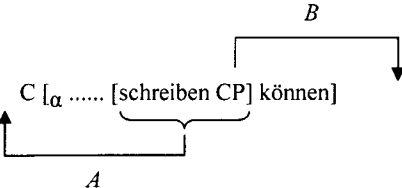
(21b) を導く可能性はいくつかある。1 つは (22) の移動が適用される前に (23a) のような短距離移動を仮定することである。

(23) C [ ..... schreiben können CP ]



しかしながら、動詞の移動は前述のように *P* 移動であり、*Topikalisierung* (*S* 移動) の前には適用できない。それにこれでは意味上ひとまとまりであるはずの [schreiben CP] がまぜばらばらに配置され、後からあらためて集合させることになってしまう。したがって (23) には無理がある。(24) のような考え方もできる。

(24) C [<sub>α</sub> ..... [schreiben CP] können]



(24) で *A* の移動が適用されれば (21a) が、*B* の移動が適用されれば (21b) がそれぞれ派生される。[schreiben CP] も構成素として導入されているので (23) の問題点も回避できる。しかしながらこれにはまた別の問題がある。(24) の *B* が適用されると CP は  $\alpha$  よりも構造的に上位になるため、CP 内の要素は  $\alpha$  の内部からは束縛されないはずだが、(25) に示すように実際には束縛されているのである<sup>15</sup>。

- (25) a. Da hat Peter<sub>i</sub> nicht mehr schreiben können, dass er<sub>i</sub> nicht kommen darf.  
 b. \*Da hat er<sub>i</sub> nicht mehr schreiben können, dass Peter<sub>i</sub> nicht kommen darf.

したがって (24) にも無理がある<sup>16</sup>。

そこで (21b) の CP が構造的に上位に位置せず、かつ [schreiben CP] の移動が可能であるような構造を考えると (26) のようになる。

(26) C [<sub>α</sub> ... können [<sub>β</sub> schreiben CP]]

(26) では  $\beta$  が  $\alpha$  の内部にあるため (25) の束縛関係が導き出せる。また [schreiben CP] も 1 つの構成素になっているため (21a) も直接派生できる。問題なのは (26) をそのまま出力すると文末動詞群の配列が (27a) のようになることであるが、これは *schreiben* を移動 (*P* 移動) させることで回避できる (27b)。この移動そのものは (23) の移動とちがひ、*S* 移動の後の移動なので可能なものである<sup>17</sup>。

- (27) a. da hat er ... können *schreiben*, dass er nicht kommen darf  
 b. da hat er ... *schreiben* können *t*, dass er nicht kommen darf



<sup>15</sup> [<sub>α</sub> ... A ... [<sub>β</sub> ... B ...] ...] で A と B が同一指示のとき、A は B を束縛する。A が B を束縛するとき、A には Peter のような名詞、B には代名詞を使うことができるが、これを逆にはできない。

<sup>16</sup> 少なくとも (24) の *B* は成り立たない。直接話法の場合なら成立するとの指摘が査読者からあったが、直接話法のとくとこの場合とは構造が根本的に異なる可能性がある。

<sup>17</sup> この移動については 3.4 節で考察する。

### 3.3. Ersatzinfinitiv と動詞の位置

Ersatzinfinitiv に関して 3.1 節で問題になっていたのは (19) に示されるような *hat* の位置であった ((28) として再掲).

- (28) a. C [... fahren müssen *hat*]  
b. \*weil Peter ... fahren müssen *hat*  
c. weil Peter ... *hat* fahren müssen

われわれは 3.2 節の考察から, (28a) の構造が不適切である可能性を指摘することができる. すなわち (26) が成立するのであれば, *fahren müssen* という配列も (29) から派生したと考えることができるから, Ersatzinfinitiv の配置は (28a) ではなく, むしろ (30) のような形から派生しているはずである<sup>18</sup>.

- (29) [... müssen [fahren ...]]  
(30) C [... hat müssen fahren]

(30) から定動詞 2 位のために *hat* が C へ移動し, *fahren* が *müssen* の左へ移動すれば *Peter hat nach Frankfurt fahren müssen* という形が問題なく派生する.

### 3.4. 動詞の移動 (2)

なぜ (30) で *fahren* は *müssen* の左へ移動するのだろうか. 動詞は前述のように, 構造が分岐点から PF へ送られる過程で移動する (*P* 移動). *P* 移動は意味情報を参照できないから, 音韻情報にもとづいて適用される. ということは, *fahren* も音韻情報によって移動しているはずである. それはどんな音韻情報だろうか.

3.2, 3.3 節で考察した動詞の移動は次のようなものであった.

- (31) a. ... *schreiben können t*  
b. ... *fahren müssen t*

これらは, どちらも本動詞が助動詞の左へ移動しているという点で共通している. ここで次の 2 文を検討してみよう.

- (32) a. weil er nicht geschrieben *hät*, dass ...  
b. ??weil er nicht geschrieben *hát*, dass ...

ドイツ語では一般に文末は (32a) のような韻律になるのが自然である<sup>19</sup>. また助動詞よりも本動詞のほうが一般に強勢をもちやすい. このことを図式化して示すと (33) のようになる. すると (32b) はこのいずれの要請にも反していることがわかる.

<sup>18</sup> Kayne (1993), Zwart (1994, 1997), 荻原 (1996) を参照.

<sup>19</sup> Curme (1922) はこのようなアクセントの配置を現代ドイツ語における „familiar end stress“ であると述べている (同書 259 頁. ほかに 258, 325, 392 頁にも同様の見解がある). この end stress は時代により異なり, 中高ドイツ語や初期新高ドイツ語では現代とは逆に [ ` ] [ ´ ] であった (325, 392 頁). 語順も (33b) の要請——これは不変——により ... *hät geschrieben* がふつうであった (フーイエ 1993: 159). なお, (33) の 2 つの要請に関して査読者から両者は独立した要請なのかとの疑問が寄せられたが, 両者が独立した要請でない限り, このような韻律の史的変化と語順の変化の関係は説明できないと思われる. また助動詞にアクセントを置くという有標の場合はいかほどの指摘もあったが, 有標というのは基本的なパターンからの逸脱であり, 自然な韻律から意図的に外れることでその効果がもたらされるのであって, ここで検討している語順と韻律の関係とはちがうレベルで捉えるべきだと考える.

(33) 文末の韻律に関する一般的要請:

- a. 韻律: [ ´ ] [ ` ]
- b. 強勢: 助動詞 < 本動詞

さて、ここで動詞移動のない (34a) のような構造を考えてみよう。

- (34) a. weil er ... hat geschrieben  
b. ... hát geschrieben  
c. ... hàt geschrieben

PFで解釈を受ける前に韻律を指定しなければならない。そこでまず (33a) の標準的な韻律パターンを適用すると (34b) のようになるが、これは (33b) の要請に反する。一方 (33b) に従って、(34c) のようにすると今度は (33a) から外れた非標準的な韻律ができてしまう。結局 (34a) のままでは必ず (33a, b) のどちらかと矛盾することになる。

ここで (31) に戻って考えてみると、こうした動詞の移動は (33) の2つの要請を同時に満たすように行なわれていることがわかる。つまり (31) に見られるような動詞の移動は、このような韻律上の要請と関係しているのである<sup>20</sup>。そしてこれは Ersatzinfinitiv の場合でも同様に敷衍することができる:

(35) (weil er ..... ) hat wöllen fähren → hat fähren wöllen

つまり Ersatzinfinitiv をもつ一見変則的な構造は、hat wollen fähren という配置から出発して、韻律による移動を仮定すれば生じるべくして生じる構造なのである。

### 3.5. 動詞の移動 (3)

前節の議論をもう少し拡張してみよう。

(35) で見た動詞の移動は1度しか適用されていない。これが2度以上適用されることはあるのだろうか。たとえば (36a) の構造からは1度の動詞移動により (36b) の文が派生されるが、実際には (36c) の形も可能だからである<sup>21</sup>。

- (36) weil diese Kinder immer .....
- a. werden wollen spielen
  - b. werden spielen wollen
  - c. spielen wollen werden

この形は移動が複数回適用されると考えれば、無理なく派生できる。まず (36a) の wollen spielen に動詞移動が適用され、spielen wollen となる。今度は werden spielen wollen に同様に動詞移動が適用されるから<sup>22</sup>、spielen wollen werden が得られる。spielen wollen の強勢は spielen が担うから、韻律の分布は spielen wollen werden と予想され、これは実際の韻律と一

<sup>20</sup> Zubizarreta (1998) の “p(rosodically motivated)-movement” の理論もこれに近いが、彼女はこの移動を Syntax 寄りに解釈している (同書 141 頁)。Chomsky (2000: 146, note 68) も head adjunction (動詞の移動はこれに含まれる) を音声部門の一部とすれば「多くの問題が解消する」と述べている (ただし Chomsky 自身はこの考え方に懐疑的ではある)。

<sup>21</sup> Duden (1998: 816) を参照。

<sup>22</sup> ここでは spielen wollen を „spielenwollen“ という1つの動詞とみなしている。wollen の強勢は実質的に失われる。

致する<sup>23</sup>.

次に Ersatzinfinitiv を含む (37) について考えてみよう.

- (37) weil Peter nach München ...
- a. hat fahren wollen
  - b. fahren hat wollen
  - c. \*fahren wollen hat

(37a) はすでに見たように *wollen fahren* → *fahren wollen* によって派生される. (37b) は注 2 で述べたように非標準的だが可能な形である. これはどういう過程を経て形成されたものだろうか. 派生の出発点は (37a) と同様に *hat wollen fahren* である. この形から *hat* と *fahren* を直接関連付ける操作は非局所的になるので, (37b) は移動を複数回適用した結果でなければならない. 考えられるのは (38a) ~ (38c) のように隣り合った動詞を順次移動させていくという派生である.

- (38) a. hat wollen *fahren*  
b. hat *fahren* wollen  
c. *fahren* hat wollen

しかし (38b) → (38c) には疑問が残る. (36c) を派生するときには *fahren wollen* を 1 つの動詞とみなして移動が適用されたからである. また, (38) の派生が許されるのであれば, (38c) に続けて *fahren hat wollen* → *fahren wollen hat* もできるはずであるが, これは許容されにくい形 (37c) を作り出してしまふ. したがって (38) のような考え方は受け入れにくい.

(37c) は *hat wollen fahren* → *hat fahren wollen* とは異なる移動で生じたものだと考えるべきだろう. (39) のような文はその意味で示唆的である.

- (39) dass der Schaden [<sub>α</sub> wesentlich niedriger gehalten oder verhindert] hätte werden können<sup>24</sup>

(39) では動詞ではなく, 動詞句 (α) の移動が起こっているように見える. これはこれまで議論したような韻律移動ではない. (37b) もおそらくこれと同じ移動を受けているであろう. つまり (40) のようなプロセスである (PP = nach München).

- (40) a. .... hat wollen [fahren PP]  
b. .... hat wollen [<sub>α</sub> PP [fahren *t*]]  
c. .... [<sub>α</sub> PP [fahren *t*]] hat wollen *t*<sub>α</sub>

ただしこれでも (40c) から *hat wollen* → *wollen hat* は可能だから (37c) の問題点は依然としてつきまとう. 以下ではこの問題が 2.1 節で議論した過去分詞の構造から解明できることを示す.

<sup>23</sup> ただし本動詞が分離動詞だとわずかに許容度の低下することがある (Velde 1981: 230 による).

(i) a. dass er ihn wird aufnehmen wollen  
b. ?dass er ihn aufnehmen wollen wird  
c. dass er ihn nehmen wollen wird

<sup>24</sup> Verde (1981: 232) からの引用. 原文は新聞記事 (FAZ). 綴りを現在の正書法に合わせて変更した.

#### 4. 韻律移動, 形態化, 接辞添加

##### 4.1. 定動詞 2 位と韻律移動

(37c) はこのままでは許容されないが, (41a) のように Ersatzinfinitiv を通常の過去分詞形にすると可能な形になる<sup>25</sup>. しかしそれでも (41b) は不可能である. この場合は Ersatzinfinitiv を使って (41c) のようにしなければならない.

- (41) a. weil Peter nach München fahren *gewollt* hat  
b. \*Peter hat nach München fahren *gewollt*  
c. Peter hat nach München fahren *wollen*

これは (42a) は不可能だが, (42b) は可能だということにとらえることもできる.

- (42) a. ..... fahren *gewollt* hat  
b. ..... hat fahren *wollen*
- 

しかしながら, 定動詞 2 位を形成する移動は韻律移動より先に適用されるから (逆にすると韻律が壊れる), (42) はむしろ (43) のように考えるべきだろう.

- (43) ... hat *wollen* fahren → hat ... *wöllen* fähren → hat ... fähren *wöllen*
- 

したがって問題は (43) の移動の後 (あるいは途中) でなぜ *wollen* が *gewollt* にならないかである. これは過去分詞形がどのように形成されているかという問題と密接に関係する.

##### 4.2. 形態化, 接辞添加, 韻律移動

###### 4.2.1. $R_T$ と $R_G$

まず (44a, b) のような形について考えてみよう. これらの形はいずれも (44c) を起点として形成される. もし (44c) から過去分詞形の形成が直接行なわれるとすると (44d) が派生されることになるが, こうすると (44e) も同様に派生可能である.

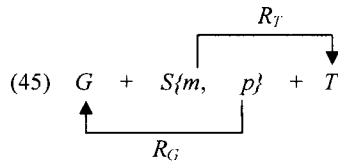
- (44) a. Er hat mir eine E-Mail geschrieben.  
b. weil er mir eine E-Mail geschrieben hat  
c. ..... hat schreiben<sup>26</sup>  
d. ..... hat geschrieben  
e. ..... hat *gewollt* fahren

<sup>25</sup> Duden (1984, 1995, 1998) は一貫して (41a) のような形を認めているが, 実際には例が少ない.

Besten/Edmondson (1983:175) にも „those who consulted found forms like *kommen gekonnt hat quite impossible*“ とある. 参考までに Web 検索サイトの Google (<http://www.google.co.jp/>) で „hat kommen können“ を検索すると約 532 件がヒットするが, „kommen gekonnt hat“ は 1 件しかヒットしない (2004 年 8 月現在). しかもその 1 件はこの問題を論じている Besten/Edmondson (ibid) のテキストであるから, 実質的にはゼロである ([http://www.dbnl.org/tekst/best005verb01/best005verb01\\_001.htm](http://www.dbnl.org/tekst/best005verb01/best005verb01_001.htm)).

<sup>26</sup> ここからは過去分詞形のできる過程について考えるので *geschrieben* ではなく, *schreiben* とする. 派生の最初の段階から過去分詞形が導入されるとする考え方もあるが, そうすると Ersatzinfinitiv は導入された過去分詞形を不定詞で上書きしていることになり, このような操作をする理由がはっきりしない. また完了形と受動形における Ersatzinfinitiv の有無の違いが出てこない (注 10 を参照).

ここで過去分詞形の構造について2.1節で考えたことを再び検討してみよう。過去分詞形の構造は(5)のようなものであった((45)として再掲)。



規則  $R_T$  は形態情報にもとづいて語尾を指定する。  $R_G$  は音韻情報にもとづいて前接辞 *ge* の添加の有無を判断する。2.1節で未解決のままだったのは  $R_T$  と  $R_G$  のどちらが先に適用されるかという問題であった。まずこれについて考察する。

#### 4.2.2. 形態化と接辞添加

(46) は低地ドイツ語の例である<sup>27</sup>。

- (46) a. Avers dien Meister hett dorbi noch telefoneren *kunnt*.  
Aber dein Meister hat dabei noch telefonieren (ge)*konnt*
- b. Jo, de hett snacken *kunnt*, wiadat ik de Arbeit daan heff.  
Ja, der hat reden (ge)*konnt*, weil ich die Arbeit (ge)tan habe
- c. Se hett eerst fragen *schullt*.  
Sie hat erst fragen (ge)*sollt*
- d. dat he dat book lesen *kunnt* hett  
dass er das Buch lesen (ge)*konnt* hat

(46) には Ersatzinfinitiv がないことがわかる。また (46d) からわかるように語順も通常の完了形と変わらない。(47) はドイツ語と同じ枠構造をもつ西フリジア語の例である<sup>28</sup>。

- (47) dat er it boek lêze *kint* hat  
dass er das Buch lesen (ge)*konnt* hat

ここにも Ersatzinfinitiv がない。過去分詞形が現れている。ただし各文の逐語訳からわかるように、ドイツ語の過去分詞形とちがいで、これらには前綴り *ge-* (あるいはそれに相当するもの) が欠けている<sup>29</sup>。つまり  $R_T$  だけ適用されていて、 $R_G$  は適用されていない<sup>30</sup>。 $R_T$  だけで十分ということは、 $R_G$  が「余計な」あるいは「追加的な」規則であるともとれる。したがって(45)は  $R_G \rightarrow R_T$  よりも  $R_T \rightarrow R_G$  という順序のほうが仮定としては自然であろう<sup>31</sup>。

以上を踏まえて(44)に戻ると、(44c)の(hat) schreiben は一度の操作で *geschrieben* になるのではなく、まず(48)に示すように „*schrieben*“ のような形になり、後で *ge-* がついて完成することになるはずである。

<sup>27</sup> (46a-c) は Kloock/Viechelmann (1989: 51, 53), (46d) は Besten/Edmondson (1983: 158) による。(46) が可能な低地ドイツ語は逆に (i) の可能性が閉ざされている。

(i) \*dat he dat book hett lesen *künn* 'n  
dass er das Buch hat lesen *können*

<sup>28</sup> Besten/Edmondson (1983: 157) による。ただし査読者による指摘を受けて原文の誤植を訂正した。

<sup>29</sup> Wyngaerd (1996: 299) がこの事実を指摘している。

<sup>30</sup> あるいはこれらの方言ない言語は  $R_G$  を持っていない。

<sup>31</sup>  $R_T$  は形態に関して本質的であるために優先され、 $R_G$  は表層的であるため後で適用されると言うこともできるだろう。



韻律移動を受けた [tun KONNT] は1つのユニットになり、外から新たな要素を内部へ添加できない。そのため (54a) に韻律移動が適用されると (54b) が形成され、ターゲットである KONNT (の左端) が  $\beta$  の内部に位置し、接辞を添加することができないのである。

- (54) a. [ $\alpha$  haben KONNT schreiben]  
 b. [ $\alpha$  haben [ $\beta$  schreiben KONNT]]

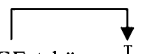
ターゲットが韻律ユニットの内部でなければ接辞添加は可能である。たとえば (55a) では (55b) のような派生が行なわれるが、接辞添加は韻律ユニットの内部ではなく、周辺部に対して行なわれるため (53) の規制にかからない。

- (55) a. weil er nicht anders gekonnt hat  
 b. ..... hat KONNT → ..... [KONNT hat] → gekonnt hat

#### 4.3. トリガーとしての接辞添加

どうして標準語では低地語のように接辞添加のない KONNT → \*konnt という形がないのだろうか。

過去分詞形の形成は標準語では形態化と接辞添加が両方適用されて始めて完了する。形態化は各動詞固有の形態情報によって行なわれるため、必ず適用されるが、接辞添加はすでに見たように環境によっては行なわれない可能性がある。そこで次のように考えることができるだろう。すなわち、「形態化」というのは実際に können → KONNT のように単独で実現されるのではなく、まず助動詞の近接で形態化の「指令」を受け (können → können<sup>T</sup>)、さらに接辞添加が行なわれたときに、それがトリガーになって実現されるのである：

- (56)  GE + können<sup>T</sup> → gekonnt

低地ドイツ語や西フリジア語は形態化の指令がそのまま実現されるのに対して、標準ドイツ語では接辞添加があって初めて全体がスペルアウトされる<sup>33</sup>。そして接辞添加が阻止されるような環境ではトリガーが働かないので、形態化の実現されない状態すなわち不定詞としてスペルアウトされることになる。つまり Ersatzinfinitiv とは形態化がキャンセルされた過去分詞形であると考えられるのである。

- (57) können<sup>T</sup> → können

結局 Ersatzinfinitiv の特殊性は、過去分詞の形態的スペルアウトが1つの手続きで行なわれるのではなく、適用条件の異なる2つの操作(形態化と接辞添加)によって行なわれることに起因しているのである。

## 5. 考察

以上の議論の有効性を確認するため、関係する他の現象について以下で考察する。

### 5.1. weil Peter nach München fahren gewollt hat

(58) は——実際には許容されにくい——Duden 文法が可能としている形である。これはどのようにして生じているのか。

<sup>33</sup> ドイツ語でもいわゆる ge- のつかない過去分詞は低地ドイツ語・西フリジア語に準ずる。

(58) weil Peter nach München fahren gewollt hat

もし Ersatzinfinitiv と同じ派生過程をたどるのであれば,  $\text{hat wollen fahren} \rightarrow \text{hat wollen}^T \text{fahren} \rightarrow \text{hat} [\text{fahren wollen}^T] \rightarrow [\text{fahren wollen}^T] \text{hat}$  となり,  $\text{wollen}^T$  が韻律ユニットの内部にあるため接辞添加ができず, そのため *gewollt* とはスペルアウトされないはずである. したがって派生のプロセスは異なるものでなければならない. これはおそらく, すでに述べた *fahren hat wollen* の派生からもう一度韻律移動が適用された結果である:

- (59) a. ....  $\text{hat wollen}^T$  [*fahren* PP]  
b. ....  $\text{hat wollen}^T$  [PP *fahren*]  
c. .... [PP *fahren*]  $\text{hat wollen}^T \rightarrow$  *fahren hat wollen*  
d. .... [PP *fahren*]  $\text{wollen}^T \text{hat} \rightarrow$  *fahren gewollt hat*

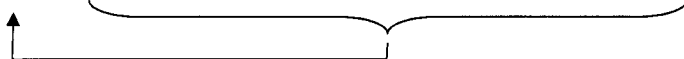
(59d) で *fahren* と *wollen* は韻律ユニットになっていない. したがって *wollen* に接辞添加が可能になり, *gewollt* という形がスペルアウトされる<sup>34</sup>.

この考え方を支持するデータとして (60) のような文がある.

- (60) a. ... weil er die Anklage nicht [*lesen können*], die Chancen seiner Verteidigung nicht [*sehen können*] und sich nicht entsprechend [*vorbereiten können*] *hat*.  
b. \*... weil er die Anklage nicht [*lesen können*], die Chancen seiner Verteidigung nicht [*sehen können*] und sich nicht entsprechend *hat* [*vorbereiten können*].

この場合は通常形 (60b) よりも変則的な形 (60a) のほうが許容される. これは (61) のような構造から  $\alpha$  全体を移動して派生したものであるからであろう. (62) が許容されないこともこれを裏付ける.

(61) ... hat [ $\alpha$  [*können lesen ...*][*können sehen ...*] und [*können vorbereiten ...*]]



(62) \*... weil er die Anklage nicht [*lesen gekonnt*], die Chancen seiner Verteidigung nicht [*sehen gekonnt*] und sich nicht entsprechend [*vorbereiten gekonnt*] *hat*.

## 5.2. Schreiben hätte er doch wenigstens gekonnt.

次に (7c) として挙げた文の派生である ((63) として再掲).

(63) Schreiben hätte er doch wenigstens *gekonnt*.

この場合は *hätte können schreiben* から *schreiben* が Topikalisierung され, さらに *hätte können* から *hätte* が定動詞 2 位形成のため移動し, その結果 *können* が単独で残るため, 接辞添加によって *gekonnt* がスペルアウト可能になる.

## 5.3. Peter hat Hans kommen sehen/gesehen.

注 1 で触れた (64) の文の許容度の差についても検討しよう.

<sup>34</sup> この派生はスペルアウトまでのステップ数が明らかに多い. これが現実に現れにくい理由かもしれない.

- (64) a. \*Peter hat nach Frankfurt fahren gemusst.  
 b. ??Peter hat Hans kommen gesehen.  
 c. ??Peter hat Hans kommen gelassen.  
 d. ?Peter hat Hans kommen gehört.

(64a) の排除される理由はすでに述べたとおりである。(64b-d) は (64a) と一見同じような構造に思われるが、実際には (65a) のようになっていると考えたほうが意味的に適切である<sup>35</sup>。

- (65) a. C ... hat sehen [<sub>α</sub> Hans kommen]  
 b. C ... Hans ... hat sehen [<sub>α</sub> t kommen]  
 c. C ... [<sub>α</sub> Hans kommen] hat sehen t<sub>α</sub>

(65a) から Hans だけ S 移動で α から抜けると (65b) になり、ここからは通常の Ersatzinfinitiv と同じ派生をたどる。一方 α 全体が S 移動すると (65c) になり、この形から韻律移動と接辞添加によって *gesehen* が派生可能である。つまり (64a) と異なり、(64b-d) は (65a) 型の構造をもっているため、許容度に差があるのである。

#### 5.4. *geworden* と *worden*

最後に受動の助動詞 *werden* の完了形について考察する。

*werden* は通常の動詞としては *geworden*, 受動の助動詞としては *worden* という 2 つの過去分詞形をもっている。*werden* → *worden* という派生ができるということは接辞添加によらずに形態化をスペルアウトすることが例外的に可能だと解釈できる<sup>36</sup>。

- (66) a. Er ist krank geworden.  
 b. Er ist getötet worden.  
 c. ... werden<sup>T</sup> getötet → ... *getötet werden*<sup>T</sup> → ... *getötet worden*

(65c) からわかるように、韻律移動によって *getötet werden* がユニットになったため接辞添加ができず、ほかの場合なら形態化がキャンセルされる場所であるが、単独でスペルアウトされている。また、(67) のような派生をもつと受動の助動詞でありながら、接辞をもった形が出てくることがある<sup>37</sup>。

- (67) Häuser gebaut sind hier schon lange nicht mehr *geworden*.

これも接辞添加の適用条件から予測される現象である。

## 6. まとめ

この論文では過去分詞形の構造および Ersatzinfinitiv に関する諸現象の分析を分析した。そこから明らかになったのは、韻律による動詞の移動と過去分詞形の発現メカニズムの 2 段階性——形態化 (形態指定) とそのトリガーとしての接辞添加——を仮定すれば、これ

<sup>35</sup> Hans は *kommen* の意味上の主語である。

<sup>36</sup> (65) では *getötet* が最初から過去分詞形に入っている。これは、注 10 で触れたように、完了形と受動形とでは過去分詞形は形成のされかたが同一ではないと考えられるからである (完了形の場合は派生の過程で形成されるのに対し、受動の場合は語彙挿入の段階ですでに過去分詞形になっている可能性がある)。完了形に Ersatzinfinitiv があるのに受動の場合にはそれが欠けていることもこの推測を裏づけるだろう。

<sup>37</sup> Fanselow (1987: 97) より引用。

らの現象に一定の説明を与えることができるということである。

## 文献

- Abraham, W. (ed.) (1983) *On the formal syntax of the Westgermania*. Amsterdam.
- Abraham, W./S. D. Epstein/H. Thráinsson/J.-W. Zwart (eds.) (1996) *Minimal ideas*. Amsterdam.
- Bausewein, K. (1990) *Akkusativobjekt, Akkusativobjektsätze und Objektsprädikate im Deutschen*. Tübingen.
- Besten, H. den (1983) On the interaction of root transformations and the lexical deletive rules. In: Abraham (ed.) 47-131.
- Besten, H. den/Edmondson, J. A. (1983) The verbal complex in Continental West Germanic. In: Abraham (ed.) 155-216.
- Bromberger, S./M. Halle (1991) *Why Phonology is different*. In: Kasher (ed.) 56-77.
- Chomsky, N. (2000) Minimalist inquiries: A framework. In: Martin, R./D. Michaels/J. Uriagereka (eds.) 89-155.
- Curme, G. O. (1922) *A grammar of the German language*. New York.
- Duden (1984) *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 4. Auflage. Mannheim.
- Duden (1995) *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 5. Auflage. Mannheim.
- Duden (1998) *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 6. Auflage. Mannheim.
- Engel, U. (1988) *Deutsche Grammatik*. Heidelberg.
- Fanselow, G. (1987) *Konfigurationsalität*. Tübingen.
- Feuillet, J. (1989) *Linguistique diachronique de l'allemand*. Bern. [J. フーイエ『ドイツ語統語構造成立のあゆみ』(手嶋竹司訳), 1993, 京都]
- Haider, H./M. Prinzhorn (1985) *Verb second phenomena in Germanic languages*. Dordrecht.
- Kasher, A. (1991) *The Chomskyan Turn*. Cambridge, Mass.
- Kayne, R. (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Mass.
- Kloock, M./I. Viechermann (1989) *Uns plattdüütsch Spraakbook*. Hamburg.
- Kohrt, M./J. Lenerz (1981) *Sprache: Formen und Strukturen*. Tübingen.
- Martin, R./D. Michaels/J. Uriagereka (eds.) (2000) *Step by step*. Cambridge, Mass.
- 荻原達夫 (1996) 文末動詞群の構造について. 『独語独文学科研究年報』(北海道大学ドイツ語学・文学研究会) 第23号. 15-34.
- Thiersch, C. (1978) *Topics in German syntax*. Ph. D. Diss. MIT.
- Velde, M. van de (1981) Zur Reihenfolge von verbalen Elementen. In: Kohrt, M./J. Lenerz (Hrsg.) 223-235.
- Webelhut, G. (1992) *Principles and parameters of syntactic saturation*. New York.
- Wyngaerd, G. van den (1996) Participles and bare argument structure. In: Abraham, W./S. D. Epstein/H. Thráinsson/J.-W. Zwart (eds.) 283-304.
- Zehetner, L. (1985) *Das bairische Dialektbuch*. München.
- Zubizarreta, M. L. (1998) *Prosody, focus, and word order*. Cambridge, Mass.
- Zwart, C.-J.-W. (1994) Dutch is head-initial. In: *Linguistic Review* 11, 377-406.
- Zwart, C.-J.-W. (1997) *Morphosyntax of verb movement*. Dordrecht.

(非常勤講師)